日本近现代文学选读

（上）

中国人民解放军外国语学院四系

一九九八年十二月

目　録

第一課　『浮雲』----------二葉亭四迷　1

第二課　『破戒』----------島崎藤村　20

第三課　『竹の木戸』----------国本田独歩　44

第四課　『吾輩は猫である』--------夏目漱石　69

第五課　『高瀬舟』----------森鷗外　106

第六課　『城の崎にて』----------志賀直哉　118

第七課　『伊豆の踊子』----------川端康成　128

第八課　『地獄変』----------芥川竜之介　155

第一課　浮雲（節録）

二葉亭四迷

第一編　第四回　言ふに言はれぬ胸の中

さて其日も漸く暮れるに間もない五時頃になつても、叔母[1]もお勢[2]も更に帰宅する光景も見えず、いつまで待ツても果てしのない事ゆゑ、文三[3]は独り夜食を済まして、二階の椽端に端居しながら[4]、身を丁字欄干に寄せかけて暮れ行く[5]空を眺めてゐる。此時日は既に万家に没しても、尚ほ余残の影を留めて、西の半天を薄紅梅に染た。顧みて東方の半天を眺むれば、淡々とあがツた[6]水色、諦視たら[7]宵星の一つ二つは鑿り出せさうな空合。幽かに聞こえる伝通院[8]の暮鐘の音に誘はれて、峙へ急ぐ夕鴉の聲が、彼處此処に聞こえて喧ましい。既にして日はパツタリ暮れる、四邊はほの暗くなる。仰向て瞻る蒼空には、餘残の色も何時しか消え失せて、今は一面の青海原、星さへ所斑に燦き出でて殆んど交睫をするやうな真似をしてゐる。今しがたまで見えた隣家の前栽[9]も、蒼然たる夜色に偸まれて[10]、そよ吹く小夜嵐に立樹の所在を知るほどの闇さ。デモ土蔵の白壁は流石に白丈に、見透かせば見透かされる……サツと軒端近くに羽音がする、回首ツて観る……何も眼に遮るものとてはなく、唯最う薄闇い而已。

心ない身も秋の夕暮れには哀を知るが習ひ[11]、況して文三は糸目の切れた奴凧の身の上、その時々の風次第で落着先は篭の梅か物干の竿か、見極めの附かぬ所が浮き世とは言ひながら、父親[12]が没してから全十年、生死の海のうやつらや[13]の高波に揺られ揺られて辛じて泳出した官海[14]も矢張波風の静まる間がないことゆゑ、どうせ一度は捨小船の寄邊ない身にならうも知れぬと兼ねて覚悟をして見ても、其處が凡夫のかなしさで、危に慣れて見れば苦にもならず宛にならぬ事を宛にして、文三は今歳の暮れにはお袋を引き取ツて、チト老楽をさせずばなるまい、国へ帰へると言ツてもまさか素手でも往かれまい、親類の所への土産は何にしよう、“ムキ”[15]にしようか品物にしようかと、胸で弾いた算盤の桁は合ひながらも、兎角合ひかねるは人の身の上のつばめ[16]、今まで見てゐた盧生の夢[17]も一炊の間に覚め果てて“ア、また情けない身の上になツたかナア[18]……”

俄にぱツと西の方が明るくなツた、身懸けた夢を其俤に、文三が振り返ツて視遣る向ふは隣家[19]の二階、戸を繰り忘れたものか、まだ障子の俤で人影が射してゐる……スルト其人影が見る間にムクムクと膨れ出して、好加減の怪物となる……ぱツと消失せて仕無ツた跡はまた常闇。文三はホツト吐息を吻て、顧みて我家の中庭を見下ろせば、所狭きまで[20]植駢べた草花立樹なぞが、託し氣に鳴く[21]蟲の音を包んで、暗黒の中からヌツと半身を捉出して、硝子張の障子を漏れる火影を受けてゐる所は、家内を覘ふ曲者かと怪まれる……ザワザワと庭の樹立を揉む夜風の餘りに顔を吹かれて[22]文三は、慄然と身震をして起揚り、居間へ遣入ツて手探りで洋燈を點し、立膝の上に両手を重ねて、何をともなく目守た俤、暫らくは唯茫然……不圖手近に在ツた薬罐の白湯を茶碗に汲取て一息にグツと飲み幹し、肘を枕に横に倒れて、天井に円く映る洋燈の火燈を見守めながら、莞爾と片頬に微笑を含んだ[23]が、開た口が結ばつて前歯が姿を隠すに連れ、何處からともなくまた愁色が顔に顯はれて参ツた。

“それはさうと如何しようか知らん。到底言はずには置けん事た[24]から、今夜にも帰ツたら、断念ツて言ツて仕無はうか知らん。嘸叔母が厭な面をする事たらうナア……目に見えるやうだ……しかし其様な事を苦にしてゐた分には埒が明かない、何にも其れが金銭を借りようといふではなし、毫しも恥ケ敷事はない[25]。チョツ今夜言ツて仕無はう……だが……お勢がゐて言ひ難いナ。若しヒョツと彼[26]の前で厭味なんぞを言はれちやア困る。其は何でも居ない時を見て言ふ事た。ゐない……時を……見……何故。何故言難い。苟も男児たる者が零落したのを恥づるとは何だ。其様な小膽な。糞ツ今夜言ツて仕無はう。それは勿論彼娘だツて口へ出してこそ言はないが何でも来年の春を楽しみにしてゐる[27]らしいから、今唐突に免職になツたと聞いたら定めて落膽するだらう。しかし落胆したからと言ツて心変わりをするやうな浮薄な夫人ぢやアなし、且つ通常の婦女子と違ツて教育もある[28]ことだから、大丈夫其様な氣遣ひはない。それは決してないが、叔母だて……ハテナ叔母だて。叔母はああいふ人だから[29]、我が免職になツたと聞いたら急にお勢を呉れるのが厭になツて、無理に彼娘を他へかたづ

けまいとも言はない。さうなツたからと言ツて此方は何も確い約束がして有るんでないから、否さうは成りませんとも言われない……嗚呼つまらんつまらん、幾程おもひ直してもつまらん。全体何故我を免職にしたんだらう、解らんナ。自惚ぢやアないが、我だツて何も役立たないといふ方でもなし、して見れば矢張課長におべツからなかツた[30]から其れで免職にされたのかな……實に課長は失敬な奴だ。課長も課長だが残された奴などもまた卑屈極まる。僅かの月給の為に腰を折ツて、奴隷同様な真似をするなんぞツて實に卑屈極める……しかし……待よ……しかし今まで免官になツて程なく復職した者がないでも無いから、ヒョツとして明日にも召喚状が……いや……来ない、召喚状なんぞが来て耐えるものか。よし来たからと言ツて今度[31]は此方から辭して仕無ふ、誰が何と言おうト關はない、断然辭して仕舞ふ。しかし其れも短氣かナ、矢張召喚状が来たら復職するかナ……馬鹿奴、それだから我[32]は馬鹿だ、そんな架空な事を宛にして心配するとは何だ、馬鹿奴。それよりかまづ差当りエ----トなんだツケ……さうさう免職の事を叔母に咄して……嘸厭な顔をするこツたらうナ……しかし咄さずにも置かれないから思切ツて今夜にも叔母に咄して……ダガお勢のゐる前では……チョツゐる前でも關はん、叔母に咄して……ダガ若し彼娘のゐる前で汚くでも言はれたら……チョツ關はん、お勢に咄して、イヤ……お勢ぢやない叔母に咄して……さぞ……厭な顔……厭な顔を咄して……口……口汚なく咄……して……ア、頭が乱れた……”ト、ブルブルと頭を左右へ打振る。

轟然と駆けて来る車の音が家の前でパツタリ止まる。ガラガラと格子戸が開くガヤガヤと人聲がする。ソリヤコソ[33]と文三が、まづ起直ツて突胸をついた[34]。両手を杖に起んとしてはまた坐り、坐らんとしてはまた起つ。腰の蝶番は満足でも、胸の蝶番が“言ツて仕無はうか”“言難いナ”と離れ離れに成ツてゐるから、急には起揚られぬ……俄に蹶然と起揚ツて梯子段の下口まで参ツたが、不図立止り、些し躊躇ツてゐて、“チョツ言ツて仕舞はう。”と独言を言ひながら、急足に二階を降りて奥坐敷へ立入る。

奥坐敷の長手の火鉢の傍らに年配四十恰好の年増、些し痩肉で色が浅黒

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

いが、小股の切上ツた[35]垢抜のした[36]、何處ともでんぽう肌[37]の萎れてもまだ見所のある花。櫛巻き[38]とかいふものに髪を取上げて、小辨慶の糸織り[39]の袷衣と養老の浴衣[40]とを重ねた奴を素肌に着て、黒襦子と八段の腹合はせの帯[41]をヒツカケに結び[42]、徹酔機嫌の喞場技でいびつに坐ツてゐたのはお政で、文三の挨拶するのを見て

“ハイ只今、大層遅かツたらうね。”

“全体今日は何方へ。”

“今日はネ、須賀町[43]から三筋町[44]へ廻らうと思ツて家を出たんだアネ。さうするとネ、須賀町へ往ツたら”ツイ近所に、あれはエート藝人……なんとか言ツたツけ[45]、藝人……”

“親睦會。”

“それそれその親睦會が有るから一所に往かうツてネお濱さんが勸めきる[46]んサ。私は新富座[47]か二丁目[48]なら兎も角も、其様な珍人會とか親睦會[49]とかいふ者なんざア七里々けぱい[50]だけれども、お勢……ウ……イプ……[51]お勢が往度といふもんだから仕様事なしのお交際で往て見たがネ、思ツたよりはサ[52]。私はまた親睦會といふから大方演じゅつ會[53]のやうな種のもんかしらと思ツたら、なアに矢張品の好寄席だね。此度文さんも往ツて御覧な、木戸[54]は五十錢だヨ。”

“ハア然うですか。それでは孰れまた。”

説話が些し断絶れる。文三は肚の裏に“おなじ言ふのならお勢の居ないときだ、チョツ今言ツて仕舞はう”ト思ひ決めて今将に口を開かんとする……折しも椽側にバタバタと跫音がして、スラリと背後の障子が開く、振り返ツて見れば……お勢で、年は鬼もといふ十八の娘盛り[55]、瓜顔で富士額、生死を含む眼元の塩[56]にピントはねた眉[57]で力味を付け、蚕々口[58]の緊笑ひにも愛嬌をくくんで無暗には滴さぬ[59]ほどのさび、背はスラリとして風に揺めく女郎花[60]の、一時をくねる細腰[61]もしんなりとしてなよやか、慾には最うすこし生際と襟足とを善くして貰ひ度[62]が、何にしても七難を隠すといふ雪白の羽二重肌[63]、浅黒い親には似ぬ鬼子でない天人娘[64]、艶やかな黒髪を惜氣もなくグツと引詰めての束髪[65]、vii薇の花挿頭[6

[66]を挿したばかりで臙脂も嘗めねば鉛華も施けず[67]、衣服とても糸織りの袷衣に友禅と紫繻子の腹合わせの帯[68]か何かでさして、取繕ひもせぬが、故意とならぬ眺はまた格別なもので火をくれて枝を撓わめた作花の嫌味のある色の及ぶ所でない。衣透姫[69]に小町[70]の衣を懸けたといふ文三の品題は、それは惚れた慾眼の贔屓沙汰[71]かも知れないが、兎にも角にも十人並優れて美しい。坐敷へ這入りざまに文三と顔を見合はして莞然、チョイと會釈をして摺足でズート火鉢の側まで参り、温籍に坐に着く。

お勢と顔を見合はせると文三は不思議にもガラリ氣が変わツて、咽元まで込み上げた免職の二字を鵜呑みにして何喰はぬ顔色、肚のうらで「最うすこし経ツてから。」

“母親さん、咽が涸いていけないから、お茶を一杯入れて下さいナ。”

“アイヨ。”

ト言ツてお政は茶箪笥を覗き

“チヤヲヤ茶碗が皆汚れてる……鍋[72]。”

ト呼ばれて出て来た者を見れば例の日の丸の紋を染抜いた首[73]の持ち主で、空嚙いた[74]鼻の端へ突出された汚穢物を受取り、振栄のあるお尻を振立てて却退る。廳て洗ツて持ツて来る。茶を入れる。サア其れからが今日聞いてきた歌曲の噂で、母子二人の口が結ばる暇なし。免職の事を吹聴[75]し度も言出す潮がないので、文三は余儀なく聴き度もない咄を聞て空しく時刻を移す内、説話は漸くに清元長唄[76]の優劣論に移る。

“母親さんは自分が清元が出来るもんだから其様な事をお言ひだけれども、長唄の方が好サ。”

“長唄も岡安[77]ならまんざらでもないけれども、松永[78]は唯つツこむばかりで面白くもなんとも有りやしない。それよりか清元の事サ、どうも意氣でいいワ。‘四谷で始めて逢うた時[79]、すいたらしいと思うたが、因果な縁の糸車。’”

ト中音で口癖の清元を唄ツてケロリとして

“いいワ。”

“其通り品格がないから嫌ひ。”

“また始まツた、へん眺馬ぢやアあるまいし、萬古に[80]品々[81]も五月蝿い。”

“だツて人間は品格が第一ですワ。”

“へんそんなにお人柄なら、煮込みのおでんなんぞを喰い度といはないがいい。”

“ヲヤ何時私がそんな事を言いました。”

“ハイ一昨日の晩いひました。”

“嘘ばつかし[82]。”

トハ言ツたが大にへこむだ[83]ので大笑ひとなる。不圖お政は文三の方を振り向いて

“アノ今日出懸けに母親さんの所から郵便が着たツけ[84]が、お落掌か。”

“ア真に然うでしたツけ、薩張忘れてゐました……エー母からも此度は別段に手紙を差し上げませんが宜しく申し上げろと申すことで。”

“アイ、お蔭さまと丈夫ださうで。”

“それはマア何よりの事た。嘸今年の暮を楽しみにして[85]およこしなすつたらうネ。”

“ハイ、指ばかり屈て居ると申てよこしましたが……”

“さうだね、可愛い息子さんの側へ来るんだものヲ。それをネー何処かの人みたやうに、親を馬鹿にしてサ、一口いふ二口目には直に揚足を取るやうだと義理にも可愛いと言はれないけれど、文三は親思ひだから母親さんの戀しいのも亦一倍サ。”

トお勢を尻目にかけてからみ文句で宛る[86]。お勢はまた始まツたといふ顔色をして彼方を向て仕無ふ、文三は余儀なささうにエヘヘ笑ひをする。

“それからアノ----例の事[87]ネ、あの事をまた何とか言ツてお遣しなすツたかい。”

“ハイ、また言ツてよこしました。”

“なんツてネ。”

“ソノ氣心が解らんから厭だといふなら、エー今年の暮帰省した時に逢ツてよく氣心を洞察した上で極めたら好からうといツて遣しましたが、し

かし……”

“なに、母親さん。”

“エ。ナニサ。アノ。ソラお前にも此間話したアネ。文さんの……”

お勢は独り切りに点頭く。

“ヘー其様な事を言つておよこしなすつたかい、ヘー然うかい……それに附けても早く内で帰ツて来れば好が……イエネ此間もお咄し申た通りお前さんのお嫁の事に付ちやア内でも些と考へてる事も有るんだから……尤も私も聞て知てる事たから今咄して仕舞つてもいいけれども……”

ト些し考へて

“何時返事をお出しだ。”

“返事は最う出しました。”

“エ、モー出したの、今日。”

“ハイ。”

“ヲヤマア文さんでもない[88]。私になんとか一言咄してからお出しならいいのに。”

“デスガ……”

“それはマア兎も角も、何と言ツてお上げだ。”

“エー今は仲々婚姻所ぢやアないから……”

“アラ其様な事を言ツてお上げぢやア母親さんが尚ほ心配なさらアネ。それよりか……”

“イエまだお咄し申さねから何ですが……”

“マアサ私の言事をお聞きヨ。それよりかアノ叔父[89]も何だか考へがあるといふからいづれ篤りと相談した上でとか、さもなきやア此地に心當りがあるから……”

“母親さん、其様な事を仰しやるけれど。文さんは此地に何か心當りがお有なさるの。”

“マアサ有ツても無くツてもさう言ツてお上げだと母親さんが安心さならアネ……イエネ親の身に成ツて見なくツちやア解らぬ事たけれども、子供一人身を固めさせようといふのはどんなに苦労なもんだらう。だからお

勢みたやうな如此な親不孝な者でもさう何時までもお懐中[90]で遊ばせても置かないと思ふと私は苦労でならないから、此間も私がネ‘お前も最う押付お嫁に往かなくツちやあならないんだから、ソノ--なんだとネ。何時までのその様に子供のような心持ちでゐちやアなりませんと、それも母親さんのやうに此様な氣楽な家[91]へお嫁に往かれりやア兎も角もネ----、若しヒョツと先に姑でもある所へ往んで御覧、なかなか此様なに我侭氣侭をしちやアなりませんヨ’。と私が先へ嘗ツて[92]苦労させるのが可憐さうだから為を思ツて言ツて遣りやアネ文さん、ナア聞てお呉れ、斯うだ。‘ハイ私にやア私の了簡が有ります、ハイ、お嫁に往かうと行くまいと私勝手で御座います。’といふんだヨ、それからネ私が‘ヲヤ其れぢあアお前はお嫁に往かない氣かエ’と聞たらね、‘ハイ私は生一本[93]で通します’ツて……マア呆れかへるぢやアないかネ一生暮らすもんが有る者かネ。”

是は萬更形のないお噺でもない。四五日前何かの小言序にお勢が尖り声で“ほんとにサ戯談ぢやアない、何歳になるとお思ひだ、十八ぢやアないか。十八にも成ツてサ、好頃嫁にでも往かうといふ身でゐながら、なんぼなんだツて餘り勘辨がなさすぎらア[94]。アゝアゝ早く嫁にでも遣り度、嫁に往ツて小喧しい姑でも持ツたら、些たア[95]親の難有味が解るだらう。”ト言ツたのが原因で些ばかりいぢり合[96]をした事が有ツたが、お勢の言ツたのは全く其作替で。“トいふが畢竟るとこ是れが奥だからの事サ[97]。私ともがこの位の時分にやア、チョイとお洒落をしてサ、小色の一ツも　了だ[98]もんだけれども……”

“また猥褻。”

トお勢は顔を皺める。

“チホヲホヲホほんとにサ、仲々小悪戯をしたもんだけれども、此娘はソー體ばかり大きくツても一向しきな[99]お懐だもんだから、それで何時まで経ツても世話ばツかり焼けてなりやアしないんだヨ。”

“だから母親さんは厭ヨ。些とばかりお酒に酔ふと直に親子の差し合ひのなく[100]其様な事をお言ひだものヨ。”

“へーへー恐れ煎豆はじけ豆ツ[101]、あべこべに御意見か。ヘン、親の

謗はしり[102]よりか些と自分の頭の蠅でも逐ふがいいや、面白くもない。”

“エヘゝゝゝ”

“イエネ此通り親を馬鹿にしてゐて、何を言ツても迚も私共の言事を用ひるやうなそんな素直なお嬢さんぢやアないんだから、此度文さんヨ-ク腹に落ちる[103]やうに言ツて聞かせてお呉んなさい、これでもお前さんの言事なら、些たア聞くかもしれない[104]から。”

トお政は又もお勢を尻目に懸ける。折しも紙襖一ツ隔てゝお錫の声として

“あんな帯留め……どめ……を……”

此方の三人は吃驚して顔を見合わせ“ヲヤ錫の寐言だヨ。”と果ては大笑ひになる。

お政は仰向いて柱時計を眺め、

“ヲヤ最う十一時になるヨ、錫の寐言を言ふのも無理はない、サア、サア寝ませう、あんまり夜深しをするとまた翌日の朝がつらい。それぢやア文さん、先刻の事はいづれまた翌日にも緩りお咄しませう。”

“ハイ私も……是非お咄し申さなければならん事が有りますが、いづれまた明日……それではお休み。”

ト挨拶をして文三は座敷を立出で梯子段の下まで来ると、後より

“文さん、貴君の所に今日の新聞がありますか。”

“ハイ有ります。”

“最うお読みなすツたの。”

“読みました。”

“それぢやア拝借。”

トお勢は文三の後に従いて二階へ上る。文三が机上に載せた新聞を取ツてお勢に渡すと

“文さん。”

“エ。”

返答はせずしてお勢は唯笑ツてゐる。”

“何です。”

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

“何時か頂戴した写真[105]を今夜だけお返し申ませうか。”

“何故。”

“それでもお淋敷らうとおもツて、オホオホ。”

ト笑ひながら逃ぐるが如く二階を駆け下りる。そのお勢の後ろ姿を見送ツて文三は吻と溜息を吐いて

“ますます言難い[106]。”

一時間程を経て文三は漸く寐支度をして褥へは這入ツたが、さて眠られぬ。眠られぬ侭に過去将来を思ひ回らせば思ひ回らすほど、尚ほ気が冴えて眼も合わず、是ではならぬと気を取り直し緊敷両眼を閉ぢて眠入ツた風をして見ても、自ら欺く事もできず、余儀なく寐返りを打ち溜息を吻きながら眠らずして夢を見てゐる内に、一番鶏[107]が唱ひ二番鶏が唱ひ、漸く暁近くなる。“寧そ今夜は此侭で”と思ふ頃に漸く眼がしよぼついて来て額が亂れだして、今まで眼前に隠見いてゐた母親の白髪首に斑な黒髯が生えて……課長の首になる、そのまた恐らしい[108]髯首が漸くの間眼まぐるしく水車の如くに廻轉てゐる次第次第に小ひさく成ツて……嬢て相恰が変わツて……何時の間にかvii薇の花掻頭を挿して……お勢の……首……に……な……

〔学研究社《現代日本文学・二葉亭四迷集》による〕

言葉注釈：

1、叔母：お政。主人公内海文三の叔父----園田孫兵衛の女中兼妾、あと、後妻となった。

2、お勢：園田孫兵衛とお政の娘。

3、文三：作品の主人公内海文三。彼は父が死んだ後一人で上京して、叔父の家に寄居しながら勉強している。とうとう下級官吏となった。

4、端居しながら：縁側に出ていながら。

5、暮れ行く：暮れて行く。

6、あがった：仕上がった。

7、諦視たら：心をこうして、見つめる。

8、伝通院：今の東京都文京区小石川にある浄土宗の寺院。応永２２年（1415年）立てられ、徳川家康の母（法号一伝通院）が寺院内に埋蔵されたので伝通院と通称された。

9、前栽：ここでは庭に植えてある花や草、木などを指す。

10、蒼然たる夜色に偸まれて：茫茫たる夜色に飲み込まれて。

11、心ない身の秋の夕暮れには哀を知るが習ひ：　令是超凡脱俗之身也会　秋日黄昏而感到悲凉，　乃是人之常情。『新古今集』西行法師（1118～1190）の短歌により、「心なき身にもあはれはしられけり＊立つ沢の秋の夕暮れ」（秋深日且暮　，沼畔候鈔・，　令入空羨，此身亦雙哀。）

……が習ひ：というのが世の常だ。

12、父親：旧幕府の臣下。明治維新後、静岡県の下級官吏となった。

13、うやつらや：憂さや辛さや。

14、官海：「官界」という言葉の上品な言い方。この段落は「浮世」「没して」「海」「高波」「官海」「波風」「捨小船」などの言葉を使った。これは日本語では“縁語関係”という。

15、ムキ：現金。

16、つばめ：「燕算用」の略語。或いは「つばめあわせ」計算。

17、盧生の夢：中国唐代の小説『枕中記』による。俗称「黄粱の夢」「邯鄲の夢」。

18、また情けない身の上になツたかナア：またかわいそうなみじめな境地に陥ったなあ。

19、隣家：家族四人を持っている官吏。

20、所狭きまで：ぎっしり詰まっている様子。

21、託し気に鳴く：ものさびしく鳴く。

22、夜風の餘りに顔を吹かれて：夜風の餘りに、顔を吹かれて。夜風がひどく吹いていて、顔まで吹いた。

23、莞爾と片頬に微笑を含んだ：片頬には微笑みを含んだ。たぶんこの時の文三は内心ではお勢の事を思い出したのだろう。

24、到底言はずには置けん事た：これはどうしても言わなければならないことだ。

事た：「こった」と読む。

25、何にも其れが金銭を借りようといふではなし、毫しも恥ケ敷事はない：これは日本士族の価値観。

26、彼：当時では日本語の第三人称は男女ともに彼という。ここではお勢を指す。27、来年の春を楽しみにしてゐる：お勢は孫兵衛夫婦が来年の春自分を文三と結婚させることを望んでいることを指す。

28、教育もある：お勢は小学校を卒業した人である。

29、叔母はああいふ人だ：叔母は相手の権勢や財力いかんによってがらりと態度を変えるような人だ。

30、おべツからなかツた：「おべツか」はもともと名詞で、「こびへつらう」の意味だが、作者はこれを五段活用動詞にした。ここではかい諧の意味がある。31、今度（こんだ）：こんど

32、我：これは対話ではなく、内心自白だから、「おれ」を使った。後の対話には文三はすべて「私（わたくし）を第一人称にした。

33、ソリヤコソ：感嘆詞。「思った通りだ、果たして」に当たる。ここでは、「果たしてお政とお勢が町から帰ってきた」ことを指す。

34、突胸をついた：びっくりした。

35、小股の切り上がった：婦人がすらりとしていて、とても魅力があることを形容する。

36、垢抜けのした：しゃれである。いきである。

37、でんぽう肌：伝法肌。いさみ肌と同じ。

38、櫛巻：くしを髪にさすこと。これは当時荒々しい婦人のいでたち。

39、小辨慶の糸織り：（小方格双色＊）明治20年ごろ婦人が出かける場合着たモダンな服の生地。

40、養老の浴衣：絞染の浴衣。

41、黒襦子と八段の腹合はせの帯：表は黒どんす、裏は絹で作った二層の帯。

42、ヒッカケに結び：＝ひっかけ結び。帯を結ぶ場合、別に飾りをしない。簡単かってな結び方。

43、須賀町：四谷区須賀町。お政の友人----お濱がここに住んでいる。

44、三筋町：赤坂区青山三筋町。

45、何とか言ツたツけ：何とか言ったっけ？

46、勧め切る：ひたすら勧める。

47、新富座：当時京橋区（今中央区）にある歌舞伎の劇場。当時東京で最高の劇場。関東大震災の時、焼かれてしまった。

48、二丁目：当時浅草区猿若町二丁目にある市村座。1923年焼かれてしまった。49、珍人會とか親睦會：ちん（珍）としん（親）の音が似ているから、それを利用してからかう。

50、七里々ぱい：七里結界から「七里けっぱい」に転じてもう一つの「里」を加えた。七里結界は仏教用語。江戸時代は俗語として使われていた。いやだ、きらう、タッチしない、関係しないという意味。

51、ウーイプー：酒、食事の後、しゃっくりする時出した音。

52、思ツたよりはサ：もとの考えよりよかったなあ。

53、演じゅつ会：演説会。

54、木戸：木戸銭。入場券。

55、年は鬼もという十八の娘盛り：「鬼も」は「鬼も十八、番茶も出花」という諺の略。意味は、年と言えば、ちょうど醜女も美しくなる十八歳という年。

56、生死を含む眼元の塩：「生死」は仏教語「生死二海」から出る。「塩」は「潮」、「秋波」である。ここで「塩」を使ったのは「ピントはねた、壷々口、滴さぬ」などと一連の縁語をなすためである。

57、ピントはねた眉：急にはねた眉。

58、壷々口：「壷口」「螺の壷々口」と同じで、婦人がすぼめて笑っている口が小さくて尖っている様子を指す。

59、愛嬌をくくんで無暗には滴さぬ：口にはあでやかを含んでいて、たやすく外に出さない。

60、さび：洒脱であって、古雅に近い様子。

61、風に揺めく女郎花の、一時をくねる細腰：女郎花は、秋の七草の一つで、時々これを女性に比喩する。

62、慾には最うすこし生際と襟足とを善くして貰ひ度：玉にきずと言えば、額髪と後の髪をきちんとすいていないことである。

63、七難を隠すといふ雪白の羽二重肌：「色の白いのは七難を隠す」から出る。百醜を覆うことが出きる。きめが細くなめらかな白い皮膚。

64、浅黒い親には似ぬ鬼子でない天人娘：「鬼子」は多義詞で、娘の容貌が父母似ぬ場合、その子を「鬼子」という。また、容貌が醜いことをも「鬼子」という。お勢はその浅黒い母----お政に似ないので、「鬼子」と言える。しかし、お勢はきれいな顔を持っている。この意味から「鬼子」とは言えない。天人娘である。ここでは一語で表裏二様の意味、一語双用の意味、の修飾法を使っている。

65、束髪：明治18年から日本で流行っていた女性の西洋式の髪式。

66、vii薇の花挿頭：新鮮なばらの花を髪にさすこと。

67、臙脂も嗜めねば鍋華も施けず：口紅もつけないし、おしろいもつけない。

68、友禅と紫繻子の腹合わせの帯：花模様の絹を表に紫のどんすを裏にした二層の帯。これは当時若い婦人のみなり。

69、衣透姫：允恭天皇の妃。皇后忍坂大中姫の妹、弟姫。皇后の嫉みを憚って河内国茅渟に身を隠した。和歌に長じ、和歌の浦の玉津島神社に祀る。（容姿秀麗で、色が衣を通して照り輝いたと言う。）

70、小町：小野小町。平安時代前期の女流歌人。『古今和歌集』の代表歌人の一人。歌仙と呼ばれ、かつ容貌が人並優れている。

71、惚れた慾眼の曇眉沙汰：あばたもえくぼというような偏愛心理。

72、鍋：お鍋。女中。

73、日の丸の紋を染め抜いた首：顔にはおしろいをあつくつけ、また、ほ

おには紅を丸く塗って、まるで顔には日本の国旗のような形が塗られている。その化粧が俗っぽくて我慢ならぬことを指す。

74、空嘯いた：知らないふりをする。

75、吹聴：ここではやむをえなく言うの意。

76、清元長唄：清元は清元節。浄瑠璃節の一派。長唄は江戸長唄。通常単に長唄という。歌舞伎踊唄、上方唄などを基として、大薩摩やその他の浄瑠璃の節調も加味し、江戸音曲の中心として発達した。清元節は伝統精神のシンボルとして当時の百姓たちに好かれていたが、長唄は俗曲ではより体面のあるものとして、良家の婦人たちに習われた。

77、岡安：長唄の一流派。

78、松永：長唄の一流派。

79、四谷で始めて逢うた時……：清元節『山帰強桔梗』の一節。

80、萬古に：いつも、いつでも。

81、品々：お政の「品格」という発音のまね。東京の百姓たちがよく「ひ」を「し」に発音する。次の文中の「人柄」をお政が「しとがら」と発音する。これらの描写はお政の教養がたりないことを暗示している。

82、嘘ばっかし：ばっかし＝ばかり、ばっかり。

83、へこむだ：へこんだ。敗北を認める。

84、郵便が着いたツけ：手紙が届いたっけ。文三の母からの手紙を指す。

85、今年の暮れを楽しみにして：文三が今年の暮れに旧里に帰り、老母を東京につれてくる予定。

86、宛てる：あてこする。遠回しに悪口を言う。

87、例の事：文三の母が手紙の中で言及した結婚問題を指す。

88、文さんでもない：文三がこうやったとは思わなかった。

89、叔父：お勢の父----園田孫兵衛。

90、お懐中：ほほ、おぽっぽ＝ふところ。

91、このような気楽な家：何のこだわりのない家。自由自在の家。しゅうと姑もいない家を指す。

92、先へ寄ツて：ごじつ、将来。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com